◇講演◇

「幼児との教育」の中で学んだこと

―教師も幼児と共に成長しているだろうか―

河辺　杲

・自己主張から思いやりへ

お互いにいかに自分というものを大事にしているかということは、これは皆さんでもそうだと思うんですが、皆さんは、これから卒業なさって、同窓会や同級会などをやられると思います。あるいはもう、中学校、高等学校の同窓会などをやられたかと思いますが、そういう時に、かりにみんなで写真をおとりになってね、その写真が送られてきた時に、おそらく誰の顔を一番に見るでしょうか。きっと自分の顔を一生懸命探すでしょう。他人の顔をひと通り見て、最後に自分のを見る人はおそらくいない。自分がどのように写っているかと、まず最初に見るだろうと思うんです。それほど自分と言うものを、大事にしているわけです。

ところで子どもの遊びを見ておっても、まず自己を強く主張したり、自己を実現していこうという、そういうものの非常な強さを感じます。でも反面さきに述べましたように、菜切り包丁を借りたいと思っている他人を一方でひしひしと感じているわけですから、それをも認めないわけにはいかない状況におかれます。

そしてこの他人の自己主張をも認めていくという。その認め方はさきほども言いましたように、たいへん下手くそですけれども、少しずつ認めようと努力していっている。そこのアンバランスのバランスがとても大事なのじゃないかと思うんです。

幼児期が混沌とかマグマのようなドロドロとした時期だと言う。混沌とかドロドロの状況のひとつと考えてよいでしょう。またこういった過程を、「思いやりが育っていく」と言いかえてもよいでしょう。したがって私はこの過程をもっと大事にしていきたいと思います。また時間をかけたいと思います。簡単に、「相手のことを考えてやりなさい」といった指導でこの思いやりが育つものでないことが子どもをもっとよく見ればわかって来ます。

さてこのような観点で子どもを見ていますとたとえば四歳のある子どもが泣いていた時、

「Mちゃん、どうしたの」と友だちが寄って来てるわけですね。

ところが寄っていった子がその子の手を握ったんです。「どうしたの」って。

そうしたらそばにいた子どもが「そんなことするとまた泣かはるで」と言ったんです。というのは、このMという子どもは少しでも触れられるとすぐ泣いてしまう、泣きっぽい子どもだったんです。そのことをそばにいた子どもはよく見て知っていたわけで、その子どもに伝えているわけです。また違う子どもが、「どうしたの」とやってきて、「絵がかきたいの？」と言うんです。どうやら、その子どもは絵がかきたくって、泣いたことがあるらしい。

次に出てきた子どもは「靴がなくても泣かんときや」って言うんです。皆、なにか自分が経験した所で、相手の泣いているのを受け止めている。

だから幼稚園生活になれて来たころの四歳児の中には、このような思いやりの姿がみられます。

相手の気持ちをくんでいく姿の中にはこうした自分の経験からのイメージがなにか働いているように思われ、このイメージにさえられた感情の表現とでもいえましょう。

本当に気持ちをくんだとか、相手を理解したとかそういう深い意味のあるものではないんですけれども、私はこうした感情とイメージの表現のつみかさねによって、他人を思いやる経験がなされるのだと考えます。

またこれは指導の中で目標を抽象的、観念的にとらえて指導をあせったり、また子どもの見方がかたよったりして指導をあやまるように思うのですが。

ある女の子二人が、ままごとのようなことをやっていたんですが、そこへ男の子が一人やって来ました。その二人の女の子のうちの一人、Iという子は、その男の子Kが好きで、IはKと一緒に遊びたいわけです。Kがうろうろしていると、一緒に遊んでいるNに、「K君まぜてあげるか」とこう打診しているわけです。「それにお父さんするって言わはるし」と、こういうふうに言ってるのですけれども、もちろんKはお父さんをするなんて少しも言ってないのですが、もしKが仲間に入ったら、お父さんの役割をしてもらえばいいのにという気持ち、自分の気持ちをあらわしたのだと思います。ところが一方のNは仲間に入ることはあまり好きじゃないらしく、何かこう不服そうな表情をして、黙っています。そこでもう一ぺん重ねてIがNに「まぜてあげなあかんで。あほうなことしやはらせんし」と言いました。

このようなかかわりの場面に出くわしますと、私たちはつい、IはKに対して非常に思いやりのあることをいったので、大へん

思いやりのある子ではないかというふうに見てしまうんですね。これはまあ、間違いとはいえないように思うんですが、でも一方Nに対してはのちほどだんだん強引になってきているわけですね。はじめは「まぜてあげるか」と聞いているんですけれども、相手が返事をしないでいると「まぜてあげなあかん」と非常に強引に言っている。だから特定の子どもに対しては、いわゆる思いやりがあっても、他方のある子どもに対しては、思いやりどころか自分の自己主張をものすごく強引に押しつけようとしているのが見られます。子どもの成長過程にはこういう面があるわけで、これも未熟と言えると思いますが、こうした成長過程をも肯定した指導が必要でしょう。それを私たちがだれに対してでもと目標を高くかかげて指導しようとあせったり、「ああ、Iっていう子はなんて思いやりがある子どもだろう」ということのみを見て、片一方のNに対しては強引に自己主張している側面があまり見えてこなかったりするわけです。

このように「思いやりの心」を育てようと思えば、まずその子どもの姿をしっかりみることから始めるべきでしょう。つまり見ていても見えている面と見えていない面があるわけです。これは両方とも四歳児ですけれども、年少の子どもに対する年長児のいろいろな思いやり方も見られます。

年少の男の子が二人、トランポリン（最近どの幼稚園にも一つぐらいありますが）を使ってあそんでいたのです。私の園でも、危険な場合があるので、ひとりしか乗らないように約束をしているんですけれども、年長の子どもはそれをよく知ってるのです。

ところが年少の子どもが二人で乗っていたら、一人の男の子は、「二人乗りはあかんで」と言ったんですが、もう一人、肩を組んでいた男の子が、「そう言うても赤組は小さいから、いいやないか」と、そんなに固いこと言うなというふうに、向こうへ連れていこうとしている場面がありました。小さい子どもだからおお目にみてやらなくてはというような気持ちが動いたのだろうと思います。

きのう東京都立N幼稚園に私の知っている先生がおられますので、その先生をたずねて幼稚園を見せてもらったんです。ちょうど卒園まで残る日が少なくなって、自分たちが飼っている動物を――小鳥だとか、うさぎだとか、それからりすだとか、いろいろな動物を年長組の子どもたちが飼っている――これを年少の子どもたちに申し送らなければいけない。どうしたらいいんだろうというので困っていたらしいんですね。去年は卒園式の日に、バタバタと、これはこうして、これはこういうふうに餌をやってというように、申し送ったらしいんですけれども、今年は早くか

ら、年長の子どもがそのことを気にしていたものだから、年少の子どもを六人ずつですね。まあ向こうの先生は「でっちぼうこう」と言ってたんですが、とにかく何か見習いに毎日年長組へ行くようにしたわけです。

朝、係の六人の子どもがやって来ると、年長の子どもはまず、「ぼくたちどれがやりたいんだ」ということをきくんだそうです。「りすがいるし、うさぎがいるし、それからインコがいるし、花の世話もあるし、キンカン鳥ですか、キンケイ鳥とかなんかいう鳥もいるし」と言って、六つほどのお仕事があることをまず知らせて、「ぼくどれにする？」って言うと、「ぼく○○にする」と言う子どももあるそうですが、とくに女の子あたりはどれにしていいか迷ってしまうんだそうです。そうすると、「君はこれが似合っている」ってね、顔つきなんか見てあてがいぶちをやるわけです。「君はそのりすがいいだろう」ってね。でもあとで、「それでいい？」って確かめるんだそうです。

こんな話を聞くと、年長児が年少児に対して非常に思いやりをもって接するのだなあと思いました。でも時々なかなか辛らつなところがあって「今日の年少のあの子たちは声が小さい」って年長児らしく言って、「声が小さけりゃ年長組になれないぞ」ともう帰ろうとしている時に忠告を与えるような場面もありまして、たいへんほほえましい状況を見せてもらえたわけです。

・年長と年少の関係

こうして考えて見ると、年長と年少の関係についてもあらためて見なおす必要があるように思われます。

特に年齢別の組編成も大事だけれども、そういうふうに、縦割りって言うんですか、三歳、四歳、五歳が、かりにいたら、そういう縦のかかわりをも見られていくということは大切だなあと思うんです。モンテッソリーの方式でやっている「子どもの家」といわれている所では、縦割り式の保育を展開しているのを以前にみせてもらいましたが、そういう場合にはただし人数が限られておりまして、二十人以下で指導されていたように記憶しています。

大津でもいろいろやっていましたけれど、四歳、五歳でうまくいく時だとか、同じ五歳でも一年保育で入って来た五歳児と、二年、年長組五歳児とでは年齢は同じでありながらやはりちがいがあって、二年目の子どもたちは、非常にリードしていこうとするけれども入ったばかりの子は、なかなか慣れていくことがスムーズにいかなくてついていけない。二年目の子どもは新しく入ってきた子を仲間に入れようとするのだけれども、もう一歩、入って

いけないということが、同じ五歳児でもあるわけです、ましてや五歳と四歳、五歳と三歳というようになってくると、その能力の開きが、劣等感や疎外感を与えて自信をもってかかわりあっていくことができないでいることがあると思います。

それからもう一つこんなことがありました。先ほど、自分の経験から想像して、友だちの気持ちをくむということを申しあげましたけれど、ちょうど自転車に乗っておって怪我をしたクラスの子どもが、帰りの時に友だち同士で話し合ってるわけなんです。「今日、ぼくと遊ぼうね」って言ってるんです。「ぼくの所へ来るか」ってもう一人の子どもに聞いて、「そやけど、お母さんに友だちの家に行ってもいいかって言ってから来いよ」って言ってるわけです。そして「自転車はあかんで、歩いてやぞ」って言ってるのです。これは先生から言われ、お母さんからも言われていることで、そういう経験から友だちに対して遊びに来てほしいし、遊びたいし、しかもお母さんの言うことをよくきいてからでないとだめだ、ということをその相手に言ってるわけです。このような場面もたくさんあちこちに見られます。

それから五歳児でこんなことがありますね。

先ほど、一番初めに申しましたような感じる力が強いのにも関係してくるんですけれども、女の子が三人いて「ここレストランにしようか」と一人の子が言ったんです。その次に、「コックさん、誰がする、コックさん」といったんですけれども、あとの女の子二人が「お姉さんしようね」「お姉さんしようね」と言ってるだけで、ちっとも、最初に提案した子どものコックさんをしようと言わないわけです、それをきいていたコックさんを提案していた子どもが、その時パッと変えまして、「ここうどんやさんにしようか」って。そうしたら「そうしよう」「そうしよう」ということになったのです。この「おうどんやさんをしようか」は、ツーと通じたんですけれども、レストランと、コックさんは何も通じなかったということです。でも私は、偉いと思ったんですけれども、最初にレストランとコックさんを言った子どもが、相手がそれを聞き入れないで、お姉さんしたいとか、お姉さんしようとか言ってるのをぴんと受けて、そして、すぐぱっと、その子どもに合うような提案に変えていく所あたり、これは本当に全身で感じとってるとも言えますし、自分の主張もしながら相手のやりたいことに、自分を合わせていこうとすることができる子どもになっていると言えると思います。

まあ、もちろんこれは、年長の子どもですが、そういうのに敏感に応じていける、こういう子どもは鋭いと言えば鋭いと言えますけれども、私は敏感にそういうものに応じていけるような子ど

もに育ってほしいなと思います。また、そういうことのできる感受性というものは、常に教師自身が子どもとの対決のなかで感じられるようになる時育つんじゃないかと思うんです。

・セルフコントロールは育てられるか

先ほどの話の中で、言い足りなかったと思うことがもう一つあるんで……。子どもが自分というものを表出できるようになっていく過程で、反面それがどのようにコントロールされるようになるのかもう一つはっきりつかめていないのですが、「セルフコントロール」ということは幼児教育の中で育てるひとつの目標のようにも考えられています。私もそういうものがどのように育っていくのだろうかということについては常に関心をもっている問題のひとつです。

ところである時、こういう場面が見られたのです。遊びを終えて保育室の中に入ってきた子どもたちが「おもしろかったね、あしたもしようね」ということでわいわい言って、何人かのグループが話し合っていたのです。

そこへA児が「何をしていたの、ぼくもまぜてくれ（ほしいな）」といってきました。A児は日ごろ、いつでも一番先頭に立たないと承知ならない子どもなんです。が、その時、その遊びのリーダー格であったY児が、「A君、一番下の兄さんするか」って言って一番下の役割づけをしようとしたんです。ところがA児は、「二番させてくれ」と遠慮気味に言ったのです。そうしたらリーダー格のY児が、「K君が二番やな」といって二番という役割は決っていてだめだと拒否したわけです。

その時、その隣にいたB児が「そうやA君、二番目のお兄さんを二人でしよう」って言いました。するとA児はすかさず「おれ、一番あかん（だめの意味）やろうか」って言うんで、とうとうA児の本音がでてしまったわけです。しかし、いつもだったら、「おれ、一番でないとやらないぞ」などというような言い方をする子どもなんですが、「一番あかんやろか」って、非常にひかえめな発言になったあたり、何か、二番目は決まっているからだめだと言われながら、一方で隣のB児から「二人でやれば」と言われ、自分が何か少し受け容れられたということで、一番の役割をもっと強く要請したかったのに「あかんやろか」という非常にひかえめな表現になったんじゃないかと思うんです。

そうしたら、「明日は一番背の高いものを一番にしよう」とまた違った提案をする子どもがでてきたり、また「一番上は大学やろ、二番目は中学、それから三番目が小学校」などともいって明日の遊びに期待をかけながらその話し合いは終りました。

この事例だけでどうこう言えないとも思うんですけれども、このような多くの事例で、こういった場面を見ていますと、他人から受け入れられると言うんですか、受容されたようなふん囲気の中では、自分というものを、日ごろ強く押し出すような傾向の子どもでも、何かひかえめな表現をしてくる。他人に自分が受け入れられるというふん囲気を感じた時というのは、自分を無理に押さえるんじゃなくて（自己受容といってもよいかもしれません）何か自然に少しセーブしたような、そういう状況が見られるわけです。これをすぐにセルフコントロールしたと言うふうにはいえないかもしれませんが、けれどもこのような自己主義を自然と若干セーブするといいますか、あるいは、自己主張と他人への思いやりのバランスといいますか、こうした態度が他から受容されるというふん囲気の中において多く生まれるという仮設を私は立てているわけです。

このようなこと、つまり「この子どもたちにもこんな面もあるのか」というように日ごろなかなかつかめないでいるものが、子どもとの接触の中で少しずつ見えてくるような感じがしておりまして、この見えなかったものが少しずつ見えてくるような体験が現場で子どもに接せられるときに非常に大事なんじゃないかと思います。

・子どものイメージ・アイデアの賛成者・協力者になる

きのうでしたか、ある幼稚園でお遊戯会……最近では、ほぼ終わってるんですけれども、よくお遊戯会という名のもとに三学期にもたれるわけです。そういう中で「劇遊び」というのがあるのをご存知と思います。そして「てぶくろ」という、ウクライナの民話がよく劇あそびとして子どもたちにもたいへん喜ばれ、劇的に表現されます。ひとつの手袋を、蛙だとかねずみだとかが、つぎつぎとみつけて「誰かはいっていますか。私もその中に入れてちょうだい」というようにつぎつぎと小動物がやって来る物語で、いわゆる繰り返しのおもしろさもあって、みつけたひとつの手袋の中をたくさんの小動物がみんなのすみかとしていくという物語です。

それをある幼稚園で、子どもたちが「やりたい」ということになって、その手袋を作りたいといったわけです。ところがその時先生の頭にひらめいたものは、劇遊びの大道具としての手袋をつくるというのですから、たいていボール箱を立ててそれに穴をあけて入っていけるように扉をつけて「とんとん誰かいませんか」とやれるようなものをつくればよいのですから、うしろの方には積木でも積んでおいて、その積木のところにこのボール紙をはれば、これでちょっと劇遊びの大道具はできあがりになるわけで

す。このような大道具としての手袋のイメージが先生にあったのでしょう。先生は

「手袋を作りたいなら、遊戯室に大きな積木があるでしょ。あそこに行って作ったらいいわよ」といったそうです。ところが、子どもたちが、やにわに「そんな積木で手袋は作りたくないんで本当に大きな手袋を作りたいんや」とこう言ったそうです。このことをきいたとき私は、子どもらしいイメージだし、よいアイデアだなと思いました。

多くの先生の中には、「そんなみんなの入れるような大きな手袋は材料などから考えてとってもできっこない」と考えるでしょう。でもその先生は偉かったと思うんです。「そんな大きなきれはないわよ」とすぐに言わなかったようです。おそらく先生もどうしようかなと思ったんでしょう。そうしたら子どもたちが、さっとそのへんを探しに歩いたんです。

ちょうどお遊戯室の片すみに保護者の人たちが何かしようとして布をたくさん持ってきておいたんだそうです、子どもたちがこれを見つけて「先生、あのきれで手袋が作れる」と言うんですね。「あのきれ貸してもらいたい」という申し入れがあって、その結果相談ができてあしたそれを作るということになっているんだとききました。

その時に私は、日ごろ、そういう問題から感じていたんですけれども、私たちは、何かを作りたい、あるいはやりたいという時は、一つの意欲と言うんですか、違った言葉で言えば、何とかこれを作らなきゃならないという切迫感と言うんですか、そういうものが一つあって、そのためにはどうしたらいいかと、いろんな知識というものが動員されてくるんだと思います。そこではじめて、知恵が生まれてくるんだと私は思うんです。ところがいくらいいイメージだとか、いいアイデアがでてきても、知恵ができても、それがものになっていかなきゃだめなんです。そのものになるためには、今の手袋のところで、先生には、もうちょっと、ものになる何かがあったらいいなあという感じがしたんです。たとえば、「それはおもしろいじゃない」と、もし言っていたら、もっと子どもたちはそのことを一生懸命になって考えようとしただろうと思うのです。

この手袋のことから私は以前に、今ヒマラヤに行っておられますが（これは講義した当時のこと）はじめての南極の越冬隊長をやった西堀栄三郎さんからいろいろのお話をおききしたことがあるんですけれども、その西堀さんの体験を連想いたしました。西堀さんが経験された南極生活では隊員が少ないのでひとりの者がいくつも役割を持たないと生活がなりたたないのだそうです。と

ころで発電機を操作するためには発電係というひとがいるのですが、南極に基地をつくった最初、ドラムかんに入った石油のいくらかある分量だけを発電機のある建物の近くまで運んでおいたらしいんです。ところが建物のそばまで運んでおいても中まで運ばなけりゃいけないのでその発電係の人は、もう一つ風呂の世話係もやっておられたようで、お風呂に入りに来る隊員の背中を洗ってあげることによって「明日すまんけど、ドラムかんの石油を運ばなければならんから一つ手伝ってくれ」と言うことで、ずいぶん気を使いながら運んでもらったりしていたそうです。

いよいよその家のまわりに運んであったドラムかんの石油が無くなってきて、今度は遠く何キロか相当離れた所からドラムかんを運ばなけりゃいけないということになってくると、お風呂で背中を洗ってあげることぐらいじゃ、どうも運んでこられそうもない。そこで、ふっと思いついたアイデアが「あの残りのドラムかんの置いてある所からこの建物の所まで、パイプがあったらいいな」ということだったそうです。

さっそく隊員の皆に「あそこからここまでドラムかんの石油を運ぶのに、パイプがあったらいいなあとぼくは思うんだけれども……」と言ったら「馬鹿な、そんな夢みたいなことを言いなさんな。パイプのかけらもないようなこんな所でパイプなどとばかげたことを考えなさるな」ともうみそくそに言われたらしいんです。

ところがその時西堀さんだけは「おもしろいじゃないか」って横から口をはさんだそうです。「おもしろい考えだ」と言われて、その人は、皆からけなされてもうだめだと思い込んでいたのになにかもう一度そこで考えなければいけないようになったわけです。ところがまた隊員の人たちが「西堀さん、いくらあんたが器用だっていったって、こんな所でパイプができるわけはないし……」と言ったら西堀さんは「氷があるじゃないか」とまあこう言ったそうです。まあそれはでまかせで言ったんだそうですけれども、「あなた、いくら器用だって、氷に穴をあけて、何年がかりでパイプをつくるんだ」とまた冷やかされて、しまいには「氷でパイプを作ったって、すぐ折れちゃうじゃないか」と。

そこで「折れない永を作ればいいんでしょ」って、売り言葉に買い言葉といったわけで、いよいよそれを考えなければいけないようになってしまって「じゃあ、折れないように作ろうと思えば氷の中に何か芯を入れればいい、何か芯になるようなものだったらボロ布でも何でもいいや」と言ったら、保健係の人が「怪我をするといけないというので包帯がたくさんあるんだけれども、誰も怪我をしないので、包帯ならたくさんある」という。「よしそ

れだ」というわけで、一メートル足らずのしんちゅうの棒があったので、それに包帯を巻いて、水をじゃっとかけるとすぐみごとに凍ってそのしんちゅうの棒が筒になっていたんでしょうね。そこにお湯をジャーと入れると、筒がすぽっと抜けちゃって、みるみるうちに多くの管が生産されていったらしいんです。その管と管の間に唾（？）をつけると、ぱっとくっつくんだそうです。そしてとうとうその夢が実現したそうです。で石油は油ですからね。水と油で、氷の管の中をさあっと石油が通ってくるわけです。成せば成るという言葉があるけれども「本当にこんなことができるだろうか」ということがとうとうものになっていって、だんだん協力者がふえてきたんだそうです。「ぼくも手伝う」ということで初めはそんなばかな、夢みたいと言って、ほとんどの人が反対の側に立っていたのが、いつの間にか、皆賛成の側に立っていた。

こういうことから、ものになるためには、それを育てる囲りの人たちが必要だということを西堀さんはいっていたのですけれども、ちょうど手袋の話をきいた時に私はこの話をふっと思い出しました。子どもがとてつもないイメージを出した時に「あっそれはおもしろい」「それはいい考えだ」というように、先生が子どもたちの味方になってやる。できないかもわからない。あるいはぜんぜんそういう材料がないかもわからないけれども、一緒になって考えていける先生の姿勢……。

そこでもたつくかもわからないし、それが三日も四日もかかるかもわからないけれど、そういうことというのは、私はたいへん大事なことだと思うのです。またこれが「育て心」なのかもわかりませんね。

でも一番初めの意欲、やろうという意欲がなければだめですし、それに知識というものがある程度結びついてこなければ……。

おそらくここでは、知恵にはならなかったと思うんです。それはその、ドラムかんを運ぶのではなく、石油を運んだらという知識だと思うんです。ものの本質みたいなものが、ふっとひらめくことが大事なんで、そのことが出てきて、初めて知恵になっていく。ただ知恵がでたり、アイデアがでたり、いい考えがでても、それがものになるためには、反対者が、足をひっぱる者があったんじゃだめなんですね。少なくとも先生は、幼児たちが考えや、アイデアや、知恵を出してきた所で、他の子どもは協力しなくても、先生だけは、ひとりひとりの子どもの出した、知恵なり、アイデアに対して、ものになるように、「それはおもしろい」とか、「それはいい考えだ」と言うように言ってやれる先生になる

ことがとても大事なんだろうと思います。

・おわりに—まとめ—

以上、自分の心に残るものをということでいくつか申し上げてきましたけれど、まあこれらのことを通して考えられるものという。うものは……。一般には教育と言うと、これこれのことを経験させなければとか、そのためにはこのような活動をこのようにさせればというように計画的、意図的具体的などといってのぞましい経験内容をキチッと組織立てた単元活動と呼ばれているものを考え、(今でもそういうことをやっている幼稚園もたくさんあると思うんですけれども) たとえば「乗り物ごっこ」一つ取り上げてみましても、そうだと思うんですね。乗り物という社会的な事象というものを、経験的にわからせたいというところで、乗り物ごっこを引き出してくるわけなんでしょうけれども、その中で、乗り物には、機関士とか運転手とよばれているいわゆる列車を動かす役割の人もあれば、乗客の面倒をみる車掌さんのような役割の人もいるし、それから、それぞれの町から乗り物に乗る時は、駅というものがあって、そこには、駅長さんとか駅員などの人がいて、切符などを売っている人があるんだということ、すなわち、いわゆる社会事象というものを子どもたちに経験的にわからせようと、それらの経験内容を仕組んだわけですね。でも私たちがよく考えてみると、こういう一般的なのぞましい経験内容をみんなに一斉に経験させたことよりも、こんな子どもがこんなふうになって、育っていったという、パーソナリティーの成長と言いますか、人格の成長というような点が、どれだけそういう経験の中で起こっているかということについては、今までもまた、今もなおあまり問題にしていなかったし、またしていないのではないかと思います。また、口では言っているがそこのところの事実をみていないのではないかと思います。こういう知識がわかったとか、こういう技術が身についたとか、こういう能力が育ったとかいうことは言えても、たとえば、お母さんから離れられなかった子どもが、だんだん離れられるようになっていった。非常に傍観をしていて、じっとしていた子どもが、活発に動けるようになってきた。とにかくぶらぶらしていて、どうにか動けたけれども、その子どもが、非常に生き生きと動けるようになってきた。全然絵もかかないし、砂でも遊ばないし、積木もやらない子どもが、なにかの手段で、どうにか自分というものを表現するようになってきた、あるいは表現の仕方に少々のかたよりはみられるがいろいろ工夫していろんなものを作り出すことができるようになってきた、そして、そこに個性的な表現がみられるようになってきた、

など。このような自発性であるとか、独自性とかあるいは社会性であるとか創造性であるとか、このような面が前よりどのように変わったのかと言う、人間の成長ということについてはあまりしっかりとは見つめてこなかったように思います。私の考える教育観では、もはや教材中心の教育観から、人間中心の教育観の方へ移行しなければいけないと思うんです。（決して教材を無視軽視したりすることをさすのではありません）教材の経験もさることながら、その根本に人間的な成長というものをしっかりとふまえておかないで、いくら社会事象がわかったり、社会の現象について理解したといっても、それは何か大事なものを育てないで、しまっていることになるんじゃないかということを、強く思うわけです。

そこでこういった点を考えてみると、幼児の自発性、本当におのずから発する自発性というような、そういうものを育て、そして仮に持っている経験だとか、知識だとかいうものが、その中で働いて、子どもなりによりよい価値を見いだしていこうとする。見いだすだけじゃなくて新しい価値をみつけそれを作りだそうとする創造的な態度にまで、高まっていくということが、とても大事だと思います。幼児たちは遊び（生活）の中でこれをどしどしおしすすめていこうとしています。すなわち、先にも例に出しましたように、自己を実現しながら、自分の感じたことや、思ったこと、考えたことを自分だけでも、他人とかかわりながらでも現実化しながら、その中で他人に対する思いやりを持っていくような、すなわち、他人を受け入れていくような、そういう両面の、バランスのとれた子どもというものが、きわめて自然に無理なく育っていくことについてどれほど、教育の中で考えているだろうか。また言うだけでなくその事実をはっきりとみつめていくということを、私はこの六年間問題にしてきましたし、このことが幼稚園教育の中ではとてもとても大事なんだなあということを思い知らされてきたひとりなんです。そしてそのためには、幼児と共に教師も成長していかなければこのことが現実化していかないということをいやというほど思いしらされてきています。こういうことが皆さんに伝えたい一つでした。

もうこのことが解決してしまっておれば、幼稚園教育については、もうやめてもいいと思うんですけれども、まだまだ不充分で、未解決のままに終わっているものですから、心残りを感じますし、もう一度幼児たちと生活をともにしながら、こういうことをさらに確かめていきたいなあと思っているのが、今の自分なのです。

（終）